

仮面ライダーヴァンシィ for Secondary creation ～仮面ライダー
ビルド～

エガえもん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

火星で発見されたパンドラボックスの引き起こしたスカイウォールの惨劇から10年

我が国は “東都” “西都” “北都” の3つに分かれ混沌を極めていた頃。

仮面ライダーと言う都市伝説が所々で起き、

その内それらは各都市の軍事兵器として現れた。

これはその兵器の宿命を背負わされた1人の物語である。

3度目。

多分伸びないと思う。

それでも書きたいから書きました。

目次

設定資料

episode 1 〓 終末の始まり、目覚める黒獅子 〓

episode 2 〓 firstの選択 〓

episode 3 〓 perfectな孤独 〓

episode 4 〓 monochromeな全て 〓

episode 5 〓 偽りのmaster 〓

episode 6 〓 悪魔とのcontract 〓

episode 7 〓 青き龍とズガガガガーンのだらだらだら 〓

22

1

3

6

9

12

15

19

設定資料

・獅子 京也

西都に住む19歳。一人称は俺。

母親、弟の三人家族だった。

父親は初めはスカイウォール惨劇前から少し後までは何処かの研究所に勤めていて、その後難波重工に勤めていたと母が言っていたが、数年前から連絡が取れていない。が、生活費は何処からか毎月送られていた。

大学に通いつつ、バイトする実家暮らし。

好きなものはブラックコーヒー（自分で淹れる奴以外。）

嫌いなものは特にはない。だが、タコアレルギーである。

特に特技はない。

苦手なことはコーヒーを淹れること。

幼いころの記憶がなく、父親の顔すら思い出せない。

何故か、いきなりハザードレベルが4以上ある。

ある日人体実験を受けるものも父親らしい人に助けられ研究所からどうやって逃げたかは分からないが逃げた後（この時その人物はブラットスタークに殺されるものも、彼からスクラツシユドライバーなどを受け取る）、実家は焼かれ、母親は家族の記憶を失い母型の実家へ、絶縁。弟は連れ去られると言った最悪なことが起こる。

その後、スターク扮する石動惣一の元、過ごす、スタークが石動だとしり、自身も捕まってしまった。

・仮面ライダーヴァンシイ

獅子京也が謎の組織（おそらく難波重工）にネビュラガスの人体実験を受けて、スクラツシユドライバーと、ブラックライオンクラックフルボトルDを使い変身した姿

見た感じはまんま機動戦士ガンダムUCに出てくるバンシイにスクラツシユドライバーが付いたような感じ。無論、二形態ある。

通常のNモードと、ハザードトリガーのデータ応用した出力を上げ

る代わりに暴走するDモード。

現在の彼のハザードレベルは4. 4。人体実験を受けたばかりの一般人とは思えないハザードレベルである。

・ブラックライオンクランクフルボトルD

ボトル底に蓋がついており、開けるとボタンがついているクラックフルボトル。(本人はまだ気づいていない。)

幻徳のプロトタイプと言われたりもするが、別物。

変身(Nモード)はローグと大差ない grief (グリーフ)は嘆き、悲しみという意味。

グリーフ！(ボトルキャップを前にすると)

ベルトに挿入

ブラック ライオン！

レバーを倒す。

割レナイ！ 食ワレナイ！ソノママア！

ブラックライオン イン ヴァンシイ!! オウラア！

変身(Dモード)はボトル底のボタンを押し、起動させることで起動する。なお、ほぼ高確率で暴走する。

グリーフ！(ボトルキャップを前にすると)

ボトル底の蓋を開けてボタンを押し。

デストロイ オン！

ベルトに挿入

ブラック ライオン！

レバーを倒す。

割レル！ 食ワレル！クダケチル！

ブラックライオン イン ヴァンシイ!! オウラア！

(もし、このギミックをDX版でやる場合↑あり得ないが、フォーゼのアストロスイッチみたい蓋を押すと裏の基盤の突起がせり上がってくる。そういう感じで捉えていただけると幸いです。)

episode 1 終末の始まり、目覚める黒獅子

「パンドラタワー頂上にて」

「又ハハハ、まずは見せしめにお前から殺してやろう。」

「ハッ：巫山戯んなよ。俺は全力で貴様を倒す！あいつ：いや、あいつらの信じた世界の為に！」

その地球外生命体エボルトを前に俺はスクラツシユドライバーを捲く。

そしてあるボトルのキャップを前にする。

グリーンフ！

待機音と共に光る、鳴るボトルを俺はスクラツシユドライバーに挿す。

ブラック ライオン！

そしてそのままレバーを倒す。

「変身！」

割レナイ！ 食ワレナイ！ソノママア！

ブラックライオン イン ヴァンシイ！！ オウラア！

その姿は目の前のエボルや、ジーニアスの白のような色ではなく全身が漆黒の鎧に染まっていた。

「明日の可能性の為に：闇に帰れ！」

「ならば来い！殺してやろう！」

この戦いの始まりは1年前に遡る

10年前、火星有人調査隊 輝 の帰還パレードにて、火星から持ち帰ってきたパンドラボックスにより、スカイウォールの惨劇が起る。日本は

東都 西都 北都 の3つに別れて 様々な物事が混沌に陥っていた。

俺の名前？俺の名前は

獅子 京也

西都に母と弟の3人暮しで住んでいた。

親父は：難波重工の社員？だったらしいがいつだったかいなくなっていた。そこら辺の記憶が曖昧なんだよなあ…。

顔を覚えていない。

そんなある日、俺はバイトの帰り道に事故にあった。

その後病院に送られると思ったがよく分からない施設に送られて、改造手術？っぽい施設でよく分からないガスを摂取された。

「やめろおおああがあああー！」

こんな風に叫んで意識を失…

「逃げるぞー！」

ガスが止まり、よく分からない男に叩き起され、訳が分からない状態のままそいつと逃げた。

途中で男はアタツシユケースを取りにそいつの部屋を経由したが駐車場まで無事に来ることが出来た。

が、

「よし…このまま…：スターク。」

目の前に赤い宇宙服っぽい奴が現れ止まる。

スタークと呼ばれたそいつはそのまま話を続ける。

「よオ。何してるんだ？」

「何って…。」

「俺がお前の裏切りに気づかないとでも？」

「くそっ…。」

「親子の再会おめでとうー！そして…さようなら、だ。」

スタークは銃っぽい何かを取り出しそのまま撃った。

「グッ…。」

流れる血、倒れる親父らしい人…。

「へ…？？」

「グッ…。」

「…これでトドメ…。」

「こっちだー！」

柱の影に隠れる俺達。

「そのアタツシユケースからドライバーとフルボトルを出せ…そいつを使つて戦い…逃げろ。」

「何言つてんだよ！訳わかんねえんだよ！戦えとか、親父とか！」

「悪かつたなあ…親父らしい事が出来なくて…もつと…お前達や母さんに…」

そのまま目を瞑つた。

「親父イイ！」

目を開けない父、

それを見て嘲るスターク

俺の手には

スクラツシユドライバーというベルトと一本のボトルが

「うわああああああ!!」

爆発の中俺は初めて変身した。

episode 2 \ first の選択

スターク（エボルト） side

辺りの爆発が静まり始めた頃

煙の隙間から黒き鎧を纏った獅子がいた。

我ながら面倒な事になったと思う。

それは所々から金色の光を放ちながら高速接近して俺とやり合う、
だが

「ほう…。だが、自我を失っていてはな！」

動きが単調な為、避けるのはさほど苦では――

「うわああああああ！ガアルルアアア！」

スクラップアップ フィニッシュ！

やべえ！

「グワツ…。こいつは面倒だな。一旦逃げるか…」

俺は霧ワープを使つて撤退する事にした。

その後落ち着いた頃に奴の行方を追つて周囲を調べた所何処かで
力尽きたのか、路地裏で倒れていた。

「しよーがないな…」

せつかくだったから拾つてやる事にした。

俺は変身を解いて近寄り、

「おーい、坊主？大丈夫かー？」

「うーん…ここは…つてうわあ!？」

「おいおい、そんなに驚くなよ。立てるか？」

「はい…。」

「近くに俺の店があるからそこで休んでけつて。」

「はい…ありがとうございます…。」

こいつは上手く使えそうだ。

side out

目が覚めると路地裏で倒れていた。

親切な人に起こして貰い、その人が経営する喫茶店まで行くことになつた。

nasita というらしい。

店に入るとこんな時間なのか、それとも集客出来てないのか客は居らず俺はコーヒーを頼む。

コーヒーを淹れてる間それまでの事をほぼフェイクで話していた。単純に俺の夢かもしれないからな。

その内容が

誰かに誘拐されかけて逃げてたらこうなった と。

まあ間違っでは無いよね？

「なるほどな。お前さんを誘拐した連中は全くもって分からない…と。」

「まあ、そうですね。」

「お前さんも気の毒だったな。コーヒー出来たぞ」

「頂きます…：…まっずー！」

思わず吹いてしまった不味さだ。

雑味と苦味が舌を支配しなおかつそいつが逃げない。

舌にへばりつくような不味さ

「おいおい…お前さんもかよ…。」

「流石にこれは飲めないです…。」

「まあ…とりあえずお前の家にでも帰って嫌なことは忘れるんだな」

「ありがとうございます…：…ご馳走様でした。お代ここに置いておきます。」

「おう。また来てくれよな！」

もう絶対行かねえ、行くとしてもコーヒーは絶対頼まねえ…。

その後、俺は走った。早く安心したくて。

日常に戻りたくて。

でも待っていたのは

燃える家

怪物

連れ去られる弟

「…あ…う…アアアアア!!!?」

訳が分からない

「ぐるああああああああ!!」

怪物が俺に狙いを定める。

不味い!?

どうするどうするどうする!?

ポケットを探る内、ドライバーとボトルに手が当たる。

く『悪かったなあ…親父らしい事が出来なくて…もつと…お前達や母さんに…』

『オヤジイイ!』く

あれは夢ではなかったと言うことだったのか。

だとすれば…

「オラア!」

俺は奴にタツクルをし、怯ます。

その隙に俺はドライバーを付ける。

ボトルキャップを前にし、

グリーンフ!

待機音と共に光る、鳴るボトルを俺はドライバーに挿す。

ブラック ライオン!

そしてそのままレバーを倒す。

「変身!」

割レナイ! 食ワレナイ! ソノママア!

ブラックライオン イン ヴァンシイ!! オウラア!

黒獅子が舞い降りた。

episode3 ｾｹ perfectな孤独

「え?なんじゃこりやあああああああ!」

いきなり、大きなビーカーに囲まれた瞬間こうなってしまった。

左手なんかグローブに包まれてるし…。右手なんかついてるし…。

「ぐるあああああああ!!」

怪物が襲ってきた。

「うえ!?うわあ!」

殴られた。痛い:けど大丈夫!

「今度は俺の番だあ!」

左手ストレートが決まる。奴にダメージが入った。

よし、この調子なら!

「おりやあああああああ!」

再度殴る

殴る殴るとにかく殴りまくった。

へトへトになるまで殴りまくった挙句思った。

…なんかこう…武器無いの?

そう思った瞬間右腕のよく分からん板2枚が勢いよく前に飛び出した。

「うわっ!…なんだこれ?」

その板2枚の間にはバチバチと電流らしい何かが流れていた。

「もしかして…こう…狙う…とか?」

奴にそれを向けた瞬間、奴に向かってビームみたいなのが飛んでいって奴が吹き飛んだ。

「こいつはいいやん!」

とりあえずそれでhit&away戦法を取ってやつとやつを倒した。

その時、何処からか銃声と共に飛んでくるエネルギー弾

「うわあ!誰だ!」

「こいつあ、驚いた。まさかhit&awayだけで倒すとはな。だが…そいつはまだ終わってないんだなあ…」

「こいつ…確か父さんを！…確かスタークだっけ。」

「てめえの仕業か！」

「まあ…俺も一因だろうけどお前の親父が悪いんだよ。そして…お前さんも生まれてきた事も。」

「何言ってるのか分かんないけど…とりあえずお前を倒す！おりゃああ！」

勢いで殴りかかるも軽々と避ける。

「甘いんだよ、ほれ。」

奴のパンチが当たる。

「ぐっ！」

「ハザードレベル4。0つてところか。流石はあの人の息子だな…。ま、今日は必殺技の仕方を教えて帰るか。」

「はっ！」

すると、奴は俺のボトルより簡易なボトルを黒い銃器に刺し、フルボトル！ スチームアタック！

「おらよっどー！」

それを…起き上がっていた怪物めがけてはなった。

それは命中するとともに爆発そして中から…

「か、母さん。」

まさかの母さんだった。

「おっと、死んじゃあいないさ…ただ記憶を失っているだけだ。それじゃ、チャオ！」

そいつは初めて会った時のように煙を出して消えた。

「…っ！母さん！」

「…っ！母さん！」

俺は変身解除をし、駆け寄る。

「しっかりしてくれ、母さん！」

「…ん…。あなたは…？」

「何言ってるんだよ、母さん！俺だよ！」

「はて…どこかでお会いしましたか？」

「嘘だろ…そんな…ははっ。こんなことって…こんなことってあるの

かよおおおおお！」

俺は炎だけが照らす漆黒の闇にただただ叫ぶしかなかった。

数日後、家族に関しての記憶を失った母さんは実家へ帰った。

いつの間にか縁も切れてた。

こうして俺は、一日にして自分の命以外ほとんど失った。

episode 4 〱 monochrome な全て 〱

俺は歩いていた。雨の中を。

ただ、ひたすら目的もなくフラフラと。

あの後、親といつの間にか縁が切れていた俺は頼れる親戚も家も無く、放浪することになった。

放浪してる間にも母さんと同じような奴らがいたので殴り倒していった。

そういや、奴：スタークは何しに来たんだ？「必殺技を教えにきた。」と言った割にはそんなもの身に着けてないんだが：ま、いいや。

そういや学校には行けてない。おそらく既に退学だろう。

いや、もうそんなことはどうでもいい。

俺にはすべてが白黒に染まってしまっているのだから。

しばらく歩いていると何かの橋の下にきた。

疲れたし、しばらくここで寝かせてもらおう――

そうして意識を漆黒の闇へと放り捨てた。

スターク (エボルト) side

奴を見つける必要がある。

あいつには是非とも『悲劇のヒーロー』になってももらわないとな。

奴の母親の記憶を消したり、縁を切ったりしたのはこの俺だ。

奴は全力でおれを目の敵にするだろう。そこまで家族思いとは恐れ入ったよ。

そこで、奴の弟を出す。あいつはそれで俺に従うだろうな。

そして、それでうまく戦鬼達を倒してくれるはずだ。

俺は周辺にスマッシュをばらまきそいつらに発信機を付け倒された周辺を搜索した。

ってかスクラップアップ フィニッシュ！使ってないな。倒されたスマッシュそのまま残ってるじゃねーか。

ま、こいつとスクラッシュドライバーじゃ色々勝手が違うから気付

いてないんだろうな。

そのうち気付くだろうか…？

しばらくして橋の下で寝ているのを見つけた。

さあして。仕事でもするか。

いつも通り変身解除し、一般人として話すでしょう。

side out

一体、何時間眠っていただろう。気づけば朝になっていて、そしていつぞやのコーヒーがくそまずいカフェのマスターがいた。

「よっ。」

「…。」

「そんな怖い顔すんなって。なあなあ、お前さんもしかして仮面ライダーか？」

「仮面…ライダー？」

「知らないのか!? 東都と北都にいたあれだよ!」

そういえば、つい最近東都と北都の戦争のニュースでそんな話が出てた気がする。

「とりあえず、俺の店に行こうぜ。話はそれからだ。」

その後、俺はマスター…石動惣一…元宇宙飛行士だった人の店に二回目の来店をすることになった。

風呂を借り、身を綺麗にして落ち着いたところで話がスタートした。

「まずは、なんで仮面ライダーって分かったんだ？俺にも分からなかったのに。」

「いやあ…黙ってて悪かったんだが俺実は少し前まで東都にいてな。見てたんだよ。仮面ライダー。」

「へえ…。」

「そんじゃ、今度はそっちの話を聞こうか。どうしてお前あんなところにいる？」

ここで俺は全部吐いてしまった。

俺が誘拐されて、人体実験を受けたこと

父親が難波重工の社員から謎の組織の人に転職してた。そして助けられてきたこと。

その父さんもブラックスタークと名乗る奴に殺されたこと。死にかけの親父からこれをもって変身したこと。

家に戻ったら母さんが化け物になってて家がなくなり、弟が連れ去られたこと。

化け物じゃなくなった母さんは記憶がはぼなくなり実家に帰ったこと。

そうして、一人放浪することになったこと。

どうして、ここで見ず知らずの人に話してしまったのだろう。

と後々思ったがこうして全部話してしまった。

「へえ…そんなことがな。おそろく、お前を改造し、お前の弟を連れ去ったであろう組織はきつと俺の娘を奪った組織だな。特徴が似すぎている。」

「はあ!?マジかよ。」

この人娘さんを…。だから俺が…。

「ああ、確か…ファウストって言ったな。」

「そいつらは何処にいる!」

「待て待てって。闇雲に探しても見つからない。俺も手伝う。」

「分かった。」

これで話がまとまった。だから、立ち去ろうと思った瞬間

「お前、今後どうすんだ?住む場所と金。」

「どうでもいい。俺は一刻も早くあいつらをつぶさなきゃならないんだ。」

「待て待てって。そんじゃ、数日したら死ぬぞ。俺が形式上住み込みで雇うからここに住めって。」

本当は断ろうと思った。迷惑をかけたくなかったからだ。けどあまりにもしつこかったからお言葉に甘えてそうさせてもらうことにした。

きつと、向こうにとっては息子みたいな感じなのだろう。凄くうれしそうだ。

episode5 偽りのmaster

マスターの店に居候して働きつつ、奴らを探して、数週間。

その間にここ 西都と東都で戦争が勃発。

西都にも仮面ライダーができたらしい。

簡単に尻尾を掴んだ。

親父の最後の職場であるはずの “難波重工” を調べたら一発で黒と判明。

二人で潜入し、取り返すこととした。

まず、俺が変身し、社内で暴れまわる。

警備が俺に気をそらされている、その間に弟とマスターの娘をマスターが救うっていう寸法だ。

マスターが脱出した後、俺も頃合いを見て離脱。

これで、上手くいけばいいが…。

スターク（エボルト） side

東都にあつて壊滅した組織 “ファウスト” がこんな所で役に

立つとはな。

そいつを使って、奴は活動的になったし、難波重工が黒だったって分からせることにはできた。

潜入させることもな。幻徳はいいとしてもあの兄弟は流石に弱すぎる。

代表戦でヘルブロスを出したとしても、五分五分だ。

奴を引き込めれば、代表戦は大丈夫だろう。

side out

作戦当日になった。

俺とマスターは裏ルートから侵入し、こっそりと進む。

が、やっぱり大企業。見つかった。

「作戦通り！マスター、後は頼んだ！」

「おう！お前さんもなー！」

マスターが奥に行つたあと、前に立ちふさがるガーディアン数体を相手にしてると。

「うがああああ……。」

スマッシュが複数のハードガーディアンと共に現れた。

「やっぱり、黒か。」

俺はドライバーを巻く。

スクラアアアアアアツシユドライバー！

聞き慣れてしまったが、まったく自己主張激しいドライバーだ。そのままボトルキャップを前にし、

グリーフ！

待機音と共に光る、鳴るボトルを俺はドライバーに挿す。

ブラック ライオン！

そしてそのままレバーを倒す。

「変身ー！」

割レナイ！ 食ワレナイ！ソノママア！

ブラックライオン イン ヴァンシイ！！ オウラア！

変身完了と同時にスマッシュ達に殴りかかっていた。

スターク（エボルト）side

あの後、少し奥まで走り奴が変身したのを確認した俺は、トランスチームガンを出す。

「さ、俺も仕事仕事。」

コブラフルボトルを数回振り、トランスチームガンに挿す。

コブラ……

「蒸血」

俺はそう眩き、トリガーを引く。

ミスト……マツチ……

その瞬間、銃口から黒い煙が放たれ、俺を包む
コ：コツ コブラ：ファイヤー！

煙が晴れると俺はブラットスタークになる。

side out

どれだけ倒しただろうか。周りは死屍累々と化していた。そして俺も体力の限界が近づいてきていた。

「はあ…。はあ…。」

その時だった。

エレキスチーム！

突然の音と共に切り付けられそうになった。

「こいつを避けるとはな。」

「スターク！」

俺は右手のビーム砲を展開し、奴に連射。しかし撃った弾は全弾躲されるか、相殺されてしまう。

「くっ！なんで！」

「お前のハザードレベルは上がっているようだが：必殺技をつかっけないもんなあ…。」

「あ！そう言えばお前なんなんだよ！必殺技教えに来たって教えてくれなかったじゃんか！」

「当たり前だろ！なんで全部一から教えなきゃならない！敵だぞ！」

「あ…。」

「隙あり！」

一瞬、呆然としてしまった隙を突かれ、蹴り飛ばされてしまう。」

「ハザードレベル4。4。かなり強くなってるな…。よし、俺の必殺技を食らわせてやるよ！」

コブラ！スチームショット！

そして奴に撃たれた。俺はそのまま変身を解除されてしまう。

「ぐわアアアア！」

振り向くとそこにはスタークが。

「よお。これを食らって、生きてたか。流石だな。だが…。」

そういつて奴はブレードの刃を俺の首に近づける。終わりか…。

「くそっ…。でも今頃マスターが…。」

そう言うとは故かブレードをしまい、俺の目の前で奴は変身解除をする…。

そこには…。

「は…嘘だろ…マスター…。」

そこにいたのはマスターだった。

「びっくりしたろ？」

「ああ…。」

「んじや、お前には一度眠ってもらおう。チャオ。」

「は？辞め…うっ。」

俺は首に何かを打たれ…そのまま気絶してしまった。

最後に見えたのはいつも通りの顔をした、マスターが。奥に行つたところだった。

episode 6 悪魔とのcontract

目が覚めると、どこかの牢屋だった。

「おはようさん。」

声が出た方向を向くとそこにはマスターが。

「そうか、最初からお前の手のひらだったってわけだ。」

「そんな悲観する事はない。ただ、一つやつてもらいたい事があるだけだ。」

「なんだよ。」

「今度の東都との代表選にお前も出る。勝ったら考えてやるよ。」

「ほんとだな。」

「ああ、但し勝ったらただけだな。無論、お前はそのドライバーの力を引き出し切れていない。代表選まであと少し。俺が短時間だが鍛えてやるよ。」

「分かった。」

その日から地獄のような特訓と実験、生活が待っていた。

このボトルの真の使い方や、必殺技の使い方までも実戦を積み短期間で伸びたと、言われるまでには成長させられた。

何度、血反吐を吐き続けてきたか分からない。でも、これに勝てれば……!

そんな思いで耐え抜いてきた…裏で何が起こっているかも知らずに。

そんなわけで、代表選当日。

一回戦目は ヘルブロスVS仮面ライダーグリスである。

結果はヘルブロスの惨敗。あれが初登場なのにも拘らず、グリスの仲間を思いやる気持ちでハザードレベルが上がり、完膚なきまでにロボロにされていた。

「仲間のありがたみを知らねえ奴の気持ちなんかなあ、知りたくもねえんだよ!」

スターク（エボルト） side
これも運命って奴か。俺は奴らが戦い始めた現場を見てそう思う。
さあ、お前ら存分に戦え。
side out

episode7 青き龍とズガガガガインのド
ドドドドド

試合開始の合図と共にぶつかると拳と拳

「うわっ！」

「くっ！」

お互いのけ反った直後

「おりゃあー！」

強烈なボディブローが俺の体に入った。

「ぐふっ！」

そのまま吹き飛ぶ。だが、相手は回復の暇を与えさせないようにする
ためか

二撃、三撃と食らわせていく。

俺は防戦一方しかなかったが

「これで…どうだア！」

この一撃が入って俺が吹き飛ばされたとき、

「今だ！」

俺は右腕部ビームスマートガン（スタークが特訓時に全武装の名前
や、必殺技など教えてくれた。）を使い奴を射撃。

突然のことに奴は反応しきれず直撃した。

そのまま、奴とは遠距離戦に持ち込もうとした。近距離戦のアドバ
ンテージは奴のほうが圧倒的に上だから。

だが、段々とやつも慣れてきたのか近距離戦に持ち込まれ、

「これで、終わりだア！」

スクラップ フィニッシュ！

咄嗟にガードするも、大ダメージを受けてしまった。

これは…もう使うしかないかな…。

く特訓中く

『このフルボトルにはほかの奴とは違った禁断のシステムを組み込んで
ある。もし、通常形態で負けそうなら使ってみてもいいんじゃない

かく。命の保証はできないけどなあ。』

『そんなもの…誰が使うか!』

『だが、現にお前は一度使っている。しかも、万丈相手に通常形態で勝てるとは当然思えないけどなあ…。』

初変身の時だったらしい。暴走してどこかに行ったんだとか。

『…。』

その言葉に何も言い返せない自分がいた

く現試合ホールく

「ぐはアッ!」

やっぱり、使うしかないのか…?

「げっ…いあれ耐えたのかよ…。でももう戦えないだろ。」

このままだと、奴のとどめの一撃が入る…負ける? 負けたらあいつの命が…そんなのはもう嫌だ!

「おりゃ…」

俺は奴の攻撃が届く寸前でレバーを下ろし、

クラックアップ フィニッシュ!

「ハアアアアアアア!」

「なんだ…グハア!」

必殺技であるクラックアップフィニッシュを直撃させることに成功。

「俺は…あいつのために…負けるわけには…いかないんだア!」

ボトルの蓋部を開けボタンを押した。

デストロイ オン!

ボトルに金色の亀裂が入ったように光った。

ブラック ライオン!

レバーを倒す。

割レル! 食ワレル! クダケチル!

ブラックライオン イン ヴァンシイ!! オウラア!

俺は再びビーカーに覆われ…そしてそのまま意識がなくなった。

万丈 side

俺と戦っていた俺たちの知らない仮面ライダー ヲヴァンシイ〃
予想とは反して、手ごたえはあったが戦い方が素人なのでやれると
思った瞬間、

あいつは、何か言った後、ボトルについていたボタンを押した。瞬
間的に嫌な予感がした。まるでハザードのような…。

案の上、予想は当たった。

目の前にはとところどころ割れた鎧を着てうなり声をあげている。
化け物がいたのだから。

「グルルルル…。」

「うそーん。」

思わずつぶやいてしまった。

side out

その後の試合展開は一方的だったらしい。

クローズを左腕部クローと壁の間で嵌め、上に吹き飛ばし、クラッ
クアップフィニッシュを食らわせ、さらにビームスマートガンを乱
射。

そして、クローズは変身解除。俺の勝ちが決まったもの…

「グルラアアアア！」

そのまま生身の状態の相手に向かって突撃。

すんでの所でスタークが割り込んでボトルを引き抜き強制解除し
たんだとか

「すまんな、万丈。だが…勝ちも勝ちだ。」

「くそっ…。」

こんな感じのやり取りがあつたらしい。

その後、第三試合になったがここで、東都の仮面ライダービルドが、
ギユインギユインのズドドドドな新兵器を使い西都代表 仮面ライ
ダーロークを打ち破って試合が終わったんだとか。

俺はそれをベッドの上で聞くしかなかった。